

2021年10月26日

報道関係各位

日本医学ジャーナリスト協会
会長 浅井文和

第10回（2021年度）「日本医学ジャーナリスト協会賞」発表

日本医学ジャーナリスト協会は、質の高い医学・医療ジャーナリズムが日本に根付くことを願って、2012年に「日本医学ジャーナリスト協会賞」を創設しました。第10回となる今年度も、全国から多数の素晴らしい作品をご推薦いただき、その中から、「オリジナリティ」「社会へのインパクト」「科学性」「表現力」を選考基準に、協会内に設けた選考委員会で慎重に審議し、次の方々を選ばせていただきました。授賞式と受賞された方々による記念シンポジウムを11月15日（月）、午後6時半より、東京・内幸町の日本プレスセンタービル9階会見場でオンラインを併用して開催いたします。

大賞・優秀賞は、いずれも、隠された真実に迫った作品。満美子賞は難病がテーマにもかかわらず温かさにあふれた作品です。ご取材いただくと幸いです。

記

第10回（2021年度）日本医学ジャーナリスト協会賞 受賞作品

<大賞>

「筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者囑託殺人事件を巡る一連の報道」
京都新聞社 ALS患者囑託殺人事件取材班

<優秀賞>

東洋経済オンライン連載「精神医療を問う」
東洋経済新報社 風間直樹さん 井艸恵美さん 辻麻梨子さん

<優秀賞>

「ルポ『命の選別』 誰が弱者を切り捨てるのか？」（文藝春秋）
毎日新聞 千葉紀和さん 上東麻子さん

<満美子賞>

「拝啓 連也様 ～マスク越しの闘病20年～」
福井放送 報道部

※「満美子賞」は当協会幹事だった故・松村（本名・曾谷）満美子さん（腎臓サポート協会名誉理事長、元NHKアナウンサー）のご寄付の遺志を生かすため、患者本人の視点を大切にされた作品に、昨年度と今年度、贈呈いたします。

[授賞式・記念シンポジウム開催要領]

日時： 2021年11月15日（月） 18:30～20:30

開催方法： オンライン講演会（オンライン開催ですが、会場にての取材もお受けします）

会費： 会員・非会員とも無料

申込方法： 協会事務局 info@mejaj.org にメールでお申し込みください。

◆受賞者に、直接、取材を希望なされる場合は、事務局までご連絡ください。

◆過去の受賞者、受賞作品については <https://www.mejaj.org/award> をご参照ください。

--お問い合わせ先（メールでお願いします）--

NPO法人・日本医学ジャーナリスト協会 事務局 担当：高貴 Mail: info@mejaj.org

<大賞>

「筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者囑託殺人事件を巡る一連の報道」

京都新聞社 ALS 患者囑託殺人事件取材班

医師による囑託殺人事件を、長期にわたる内偵取材を経て、「逮捕へ」とネットニュースの特ダネで報じただけでなく、女性の生前の苦悩や葛藤、2人の医師のこれまでの足跡、難病患者が事件を受け止めた気持や生きる権利の保障などを、多角的に詳報して他紙を完全に引き離しました。

仕事と趣味を楽しんでいたこの女性は筋萎縮性側索硬化症（ALS）になったのちも、在宅サービスを受けて8年の間、一人暮らしを続けていました。

連載『『#安楽死』の果てに』では、この女性と医師がSNSで結びつき安楽死へと突き進んでいった事件の闇や、難病患者の生を阻む偏見などに切りこみました。

続く4つの連載、「『生きる』を語る」「瞳が選ぶ言葉と～ALS独居と支援」「『安楽死』をどう考える」「命揺れて見つめて～ALS事件が問うもの」で、さらに幅広く問題提起しました。

「よくある安楽死論議に終わらず、『生きていたいと思える社会に』という報道姿勢で一貫している」「医師・研究者・NPO組織など多方面からアプローチした取材方法が好ましい」「彼女に日々生きる希望をどうやってもってもらえばよかったのか、社会に大きな課題を投げかけた」など、選考委員一致で大賞と決まりました。



<優秀賞>

東洋経済オンライン連載「精神医療を問う」

東洋経済新報社 風間直樹さん 井岬恵美さん 辻麻梨子さん

「精神科入院経験者8割が入院中に悲しい・つらい・悔しいなどの体験を味わっている」という1000人規模の調査をもとに、日本弁護士連合会が10月、「精神障害のある人の尊厳の確立を求める決議」を採択し、法改正を求めました。しかし一般紙はほとんど報じませんでした。

精神医療は他人事、読者の関心をひかないという紙面づくりが常態化した残念な現実です。

その中で、経済を専門とする東洋経済新報社が、2020年1月から3人の記者を投入。理不尽な現実に向き合った当事者の声を丁寧に紹介している点が秀逸です。

「病院への暴力的な移送」「離婚した元夫の策略で、子供の親権を取るために突然の入院を余儀なくされた女性」「死に至る身体拘束をやめようとしない精神病院の現実」「引きこもりの当事者を無理やり連れ出し拉致監禁する『引き出し屋』」など、いずれも、新聞で報じてよいニュースばかり。そうした報道姿勢に共感が集まり14本の連載記事のページビューは、累計で約2500万にのぼっています。

「問題点は分かった。改革の道筋が欲しい」という声にこたえて、近く始まる第2部では「事例にもとづいた改革の方向が提示される」とのことで、期待がもてます。



<優秀賞>

「ルポ『命の選別』 誰が弱者を切り捨てるのか？」 (文藝春秋)

毎日新聞 千葉紀和さん 上東麻子さん

キャンペーン報道「優生社会を問う」をもとに書き下ろしたものだ。生命科学や医学分野の問題を長く追ってきた千葉紀和記者と福祉医療分野で深い取材に定評がある上東麻子記者が共同作業で、「弱者の切り捨て」を幅広い視点で捉えました。

第1章で明らかにした新型出生前診断ビジネスの実態は、厚生労働省の専門委員会で取り上げられ、国が関与する新制度成立に繋がりました。

第6章では、他メディアがとりあげない相模原殺傷事件の真相に迫り、神奈川県「当事者目線の障がい福祉に係る将来展望検討委員会」に繋がりました。

写真の青年は人里離れたやまゆり園にいたときは最重度とされ、「面会にいくとフケだらけで臭かった。やまゆり園を出た今は、表情が豊かになり、月8000円の工賃を得て、体格もしっかりしてきた」と両親は変化の大きさに驚いています。

「障害者が大量に殺されれば大きなニュースになるけれど、見えないところに遠ざけられ、縛られても、おそろしいほど無関心だった」と、筆者たちの矛先はメディアにも向けられています。

「出生前診断ビジネスから相模原殺傷事件まで横串を刺して、考える場を広げたことは、まさにジャーナリズムの役割」とも評価されました。



<満美子賞>

「拝啓 連也様 ~マスク越しの闘病20年~」

福井放送 報道部

マスクを着ける生活に違和感、嫌悪感を抱く人々。「高IgD症候群」という難病で、マスク生活を続けてきた連也さんを追うことで、私たちが気付かされることや学ぶことがあるのではないかという思いが制作の出発点でした」とディレクターは語っています。

全身に激しい炎症が起きる病気で、日々感染症との闘い。小学生になっても身長80センチ。写真は初めて歩けるようになった瞬間の映像です。母も妹も本人も、はち切れるような笑顔。このような瞬間を撮れたことから、取材班が一家から深く信頼されていることがうかがわれます。

難病を追う映像は暗くなりがちですが、痛くて苦しい時には、ユニークな絵で痛みを紛らわす思いを表現し、それを映した番組をきっかけに、東京で絵画展が開かれるなど、番組は彼の人生にとって大きな転機となっています。

20歳になった今は趣味の写真を通じて新たな道を歩み、リモートではあるけれど、成人式に参加する姿が映し出されます。「日常生活と自立の様子に焦点をあてて描くことで多様性のある社会への道を示している」と選考委員たちは賛辞を述べていました。

